

スターリン時代に恐怖の渦中に投げ込まれ、苛酷な収容所生活に耐え抜いたユダヤ系女性の回想である。ソ連の収容所については、既に告発の書が数多く書かれているが、この回想は従来のもとは一線を画すような比類ない体験や観察を含んでおり、実に新鮮である。



仮に社会主義やスターリンズムといった文脈を離れて読んだとしても、波瀾に富んだ人生を懸命に、また愛情豊かに生きた女性の自伝として文句なしに面白い。
著者は一九一五年ワルシャワ生まれ。両親は熱烈な共産主義者だった。父はトロツキ―とともに革命のために戦っ

ソヴィエト流浪

スザン・ロー
ゼンバーグ著

苛酷な収容所生活の鮮明な回想

た闘士だが、革命後の内戦で命を落とす。一方、母はウクライナで革命運動に従事したが、革命の五年後に混乱の続くソ連をいったん離れる決意をし、娘(筆者)を連れて親戚のいるカナダに移り、共産主義の宣伝を続けた。そして、三一年には移民団を組織して「理想の国」と信じたソ連に娘とともに戻り、ここから著者の「ソヴィエト流浪」が始まるのである。

母親の感化を受け、非常にロマンティックな理想主義者として育っていた。その彼女がソ連に戻って見た現実、理想とはかけ離れたものだった。やがて粛清の時代が始まって、夫は逮捕され、弟は自殺に追い込まれる。そして、最後に母親と著者自身も逮捕され、スパイ罪でシベリア送りになるのである。

とはいえ、これは単なる政治的告発の書ではない。収容所の地獄の中に顔をのぞかせる野いちごを見逃さない著者には、繊細な詩人のまなざしが備わっている。そして、カナダ市民権を取得し、現在カナダに住む彼女は、新しい社会の夢を信じる者たちの「炎は再び燃え上がるのだろうか」と最後に問い掛けるのである。

誰しもこの結びを読めば、「あれほどの辛酸をなめさせられながら、またこんなことを？」と、著者の不屈の理想主義的気質に驚くとともに、爽やかな感動を覚えることだろう。

ソ連で共産主義の根本的な見直しが始められている折だけに、この問いの意味は極めて大きい。

―荒のひみ

(岩波書店・二五〇〇円)
東京大助教授 沼野充義

める手紙」チャールズ・ハミルトン著
美術公論社・3500円



ルーズベルトは手紙は大きな。サッカレー、ウルフ、抵はタイプし、それに手書オー・ヘンリー等の作家もきの訂正がびっしりと入っ達者な絵を描く。コナン・ているそうだが、ここで探 Doyleの伯父にあたるリチャード・Doyleの諷刺画、は動物や人の十五歳で描かれたと言ったスケッチが入るのである。ヴァン・ルーンは簡潔にして宛て書いた手紙に見られる空を飛ぶキリンの絵、これは父親のお伽話なんだろうを書いてい、か、こんな手紙を受け取る。酒瓶をじ息子が見ましく思える。と見つめる ころして五十六人の絵入自画像と二匹り書簡をたぐっている、の犬を描く興味は尽きない。ただ、リンク、宛書き学者に属する人がフランクの脇に奔放なリンだけで、これは田の中の線画の馬を描いたピカソ、だが、もし現物が残っているなら、科学者の分も編集